



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail: daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL: 06-6354-3011

謹賀新年

今年も宜しく願い申し上げます。

お役に立たない唯のお笑いエッセイですが、あるときは渾身の力をこめて、またあるときは適当に力を抜きながら、思うままに筆を進めていきたいと思えます。お付き合いの程をお願い申し上げます。

「シク教5 幻を見ない方法」

読者諸氏よ。去年は幻を見なかったかい？

幻とは何だ、とわが輩に問うことなかれ。ほら、あなたが今見ているすべてが幻影だよ。この幻は砂漠の蜃気楼のようなもので、われら凡人が在ると誤解して執着し、惑わし、苦惱させるものである。

これをインドでは「マーヤー」と言う。それと対局にあるのが<サット> (真実在) である。難解なことに、真実在から幻が生じるというのだ。

これをわが輩の譬えで言うと、「卵型石から卵が産まれたようなもの」である。

(全くインド人は難しいことを言うものだよ)

少し横道にそれるが、わが輩の“まやかし”話をしてみよう。

『ブッダは実在しない』(島田裕巳著)を本屋で立ち読みをした話を一席。

宗教学者というものは、面白いでもなく、面白くないでもない本を上梓するものだ。要は、われわれが「ブッダ」という観念を幾重にも作り上げた。だから、それは観念であって、実在の人間ブッダではない。

(重ね着をした人のコート上着下着は、その人つまりブッダではないということか)

日本でも明治時代になるまで実在の人物であると信じられていなかった。先にブッダという「観念」があって、仏教が広まった。

(なるほど、そうかもしれない。それで、先生はその次に何を言いたいのか?)

わが輩なら次のように言う。この「観念」もマーヤーである。もし真実在からマーヤーが生じるなら、われわれが作り上げたブッダという観念は、<ブッダ>から生じているのではないのか。つまり、<ブッダ>とブッダという「観念」は不離の関係にあるといえる。

考古学的には、ブッダ生誕の聖地ルンビニーでその実在が明らかになった。観念ではなく、

一人の人間が存在したのである。

ご本人の身体は消滅しても、彼の衣服（教え）は残る。それは彼に合わせて作られたものである。

一人の人間から、開展してブッダの「観念」となった。後世の者が人間ブッダを知ろうが知るまいが、連続する<ブッダ>は存在したと言える。ブッダは実に実在したのである。

そして二千五百年もの間、その観念は人々を救ってきた。

さて、話を本筋に戻そう。

シク教で言うマーヤーは、前段のような伝統的解釈による漠然とした宇宙的幻影、真実在を覆い隠す「霧」のようなものではない。現実的で唯物論的に解釈しているようである。

伝統的解釈によると物質はマーヤーである。物質は変化するからである。

シク教では、客観的物質（衣服、食物、家屋）はマーヤーではない。現実生活でこれらが無ければ生活が成り立たない。

（それでは、何がマーヤーなのだい？）

主観的誤謬、つまり“思い違い”がマーヤーなのである。情欲、食欲、執着、怒り、高慢の五悪がマーヤーである。

シク教は、生活実感を重視しているようである。だから、伝統的修行者サードゥーになって、家庭を棄てる必要はない。むしろ、家庭にあって一生懸命に働けと言う。

（修行者の格好をしていい気になるな。そんな暇があるなら、働け！と言うのか？）

ナーナクの生誕寺近くに、マールジ・サーヒブ寺がある。コブラのグルドワラーとも呼ばれている。

ナーナクが木陰で眠っていたとき、陽が傾き日差しが彼を襲った。そこにコブラが穴から這い出してきた、鎌首を上げて日蔭を作った。高級官吏が馬に乗ってやって来て、その光景を見て驚いた。その噂はすぐに広まった。

コブラが出てきた穴があり、それを潜ると厄難から逃れられると信じられている。

インド説話には、よくコブラが登場する。怖いものを恐れない、それをも屈服させるということの象徴である。

その説話よりも大事なものは、そこに掲げられている三枚の絵である。

1. 牛を使い耕す絵（働け！）
2. グルの教えを聞く絵（瞑想しなさい）
3. 施食をする絵（慈悲・奉仕しなさい）

シク教という教えは、正に二十一世紀でも有効な教えではないかい、読者諸氏よ。

われわれはマーヤーの世界でしか生きられない。迷いながら生まれ迷いながら消えていく存在である。そのような世界にあって、一生懸命に働き、妻子を養い、たまには瞑想して心を整え、余った金品は寄付する。それに熱中しているときは、少しは霧・幻が晴れるかもしれない。熱中することこそ、幻を見ない方法なのである。

今年は、少しだけでも霧を晴らそうよ。読者諸氏よ。